



夏休み目前、確認してみましょう！

前号では、夏休み目前の計画の立て方について、確認しました。ここで、もう一度、目標設定について、確認しておきます。

志望校の配点調査票を配りました。みなさん、きちんと書き上げたでしょうか？

「何をすればいいのか」こんなことに簡単に答えられれば、苦労ありません。たとえば、「1日10時間勉強すれば合格する」なら、とにかく「予備校の自習室に通い詰める」で合格をします。「〇〇という問題集を終わらせる」なら、とにかく「〇〇という問題をやる」で解決します。しかし、大事なことは、「何をするか」ではなく、それをした「結果どうなっているか」です。

「合格するために何をするか」「何をして、どうなるか」こうした視点で語らない限り、「言われた通り10時間勉強したのに…」「言われた通り〇〇をやったのに…」となるだけです。そうならないためには、目標をはっきりさせること。

ただ、この目標は、「〇〇大学に受かる」では足りないのです。〇〇大学の配点を知り、問題傾向を知り、そして、自分の現状を考え、夏の優先順位を決めることです。

もう一度、聞きます。「配点調査票は書き終えましたか？」「科目の優先順位は決まりましたか？」最後のチェックをして、夏の計画をもう一度確認しましょう。

- ① 配点を調べましたか？
- ② 科目の優先順位は決まりましたか？
- ③ 配点や分野についての特記事項に気づきましたか？
- ④ センター科目の得点と二次の得点の重みの違いを把握しましたか？
- ⑤ 前期と後期、第一志望と次善校の得点の重みの違いを把握しましたか？

受験に関わる今後の予定

8月30日、31日 全統記述模試 学校受験 ※指定校推薦大学の発表

9月初旬 芝浦工大数学統一テスト

※未受験者は、二次推薦も含め、芝浦工大への推薦入学の権利を失います。

9月中旬 指定校推薦の学内応募

および学校長の推薦を伴う各種入試（AO・公募など）の学内応募締め切り

※ただし、締め切りが早い大学については、2週間以上の余裕を持って申し出る。

9月中旬 センター試験の出願説明会（生徒向け）

9月20日～ 前期期末試験

※指定校を含む各種推薦の成績確定はこの後行います。

10月1・2日 文化祭 参加者のみ登校（自宅学習でもかまいません）

10月3日 終始業式 全員登校 推薦学内選考発表予定

秋休み明けすぐ センター願書提出＝理科・社会の受験科目型確定

※変更はできません。

芝浦工大推薦出願

10月15日 保護者会 全体会実施いたします。

保護者会后、保護者面談→12月中旬以降受験校確定

※最終的な併願作戦の確定は、10月の模試返却（12月初旬）後、12月10日過ぎの入試情報確定後に行います。

この予定を見ても、夏休み明けには、各種推薦、芝浦工大推薦、センター出願など、さまざまなことが動き出します。進路について相談のある生徒は、夏休み中学校で自習をするなどの機会を通じて、教員へできるだけ早めに行うようにしましょう。

センター試験については、全て学校の指示により動きますので、各自で準備することはありません。願書配布、記入上の注意、願書提出など全て学校から連絡します。

センター試験の会場については、大学入試センターで自動的に割り振られますので、生徒それぞれ、あるいは本校の希望などを出すことはできません。例年、本校は流山、野田などの大学キャンパスになることが多いようですが、受験票が送られてくる11月～12月まで会場はわかりません。

各種推薦入試についての注意

推薦入試については、各種説明してきたつもりではありますが、再度いくつかの注意点を掲げますので、慎重に考えて出願してください。

芝浦工大推薦

- ① 第一志望に限りません。したがって辞退はできません。
- ② 成績・出欠・生活面の基準がありますので、下回る生徒は推薦されません。
- ③ 学部の枠がありますが、枠については発表しません。例年、各学科均等になるケースが多いです。
- ④ 統一テストの未受験者は推薦資格を失います。二次推薦もされません。
- ⑤ 二次推薦については、若干名の募集となり、空きのある学科に限定されますので、志望する学科系がなかったり、優秀でも不合格となったりすることがあります。
- ⑥ 選考は、基準を越えている生徒の中で、3年間の成績、推薦試験（卒業試験）の成績で行われます。

指定校推薦

- ① 基準を越えれば、出願できますが、指定された枠内（たいていは1名）の中で推薦しますので、学内で選考があります。
- ② 学力・生活・人物・志望動機など様々な面を総合的に判定します。ふさわしくない生徒は推薦できませんし、明らかに総合的に優れた生徒を優先的に推薦します。ただし、そうした面で優劣がつけにくい場合は、成績で決めることが多くなります。
- ③ 第一志望に限りませんので、1度に複数の出願はできません。
- ④ 進学することが条件です。また、進学後、転学、転科などは次年度の枠の取り消しになりますのでそうした心配のない生徒を推薦します。
- ⑤ 先輩の実績を使って進学するわけですから、今後も後輩のために協力してくれる生徒でないと困ります。
- ⑥ 当然のことながら辞退はできません。

公募・AO・自己推薦

- ① 第一志望と限定されている場合、同時に複数出願することはできません。併願可であれば、その限りではありません。

- ② 第一志望がうたわれていれば、辞退はできません。
- ③ 高校入試と違い、合格が約束されていたり、受かりやすくなったりするわけではありません。むしろ、難関になると思ってください。
- ④ 面接、小論文が課されている場合、たいていは進学する学科に関わる専門的な知識と実績（レポート、論文などの提出）が必要となり、準備にかなりの時間を要するケースがあります。
- ⑤ 学科試験が課されている場合、0次入試的な意味合いが強く、本試験より難度が高いケースが多くなります。
- ⑥ 倍率が低かったとしても、評定などの基準がある場合、優秀な人の中での倍率ですので、一般入試と比べるわけにはいきません。したがって、ぎりぎりで出願する場合、アドバンテージはありません。
- ⑦ 大学によって、どういう基準で選考するかが大きく異なりますので、慎重に調べて準備をしましょう。
- ⑧ こちらでは、紹介などは行いません。まずは自分で願書などを取り寄せてください。

保護者へのお願い

さまざまな入試情報交換会に出ていると、進学実績に立ちほだかる「敵」のひとつに「保護者」をあげることが多いようです。私たちは「敵」とは思っていないですが、志望校合格に向けて、皆様のご協力を仰がなければいけないことも確かです。これまでもいくつかのお願いをしてきましたが、夏休みを前にいくつかのお願いをしておきたいと思います。

志望校を下げさせない

この夏の第一の注意点は「志望校を下げさせない」ことです。もちろん、第一志望（たとえば早稲田）も、第二志望（たとえば明治）も、第三志望（たとえば日大）もE判定であると言うようなときに、現実的に志望校を第二志望あたりにする、ということであれば、さほどいけないことではありません。しかし、第一志望がD判定、第二志望がB判定などと言うときに、志望校を下げるのは、完全に失敗につながります。なぜなら生徒は楽になりたいからです。どうして、ここで志望校を下げるのかといえば、「第一志望に向かう学習が難しい。第二志望なら楽になれる」という理由に他なりません。結果、どうなるかといえば、「受かった気になって勉強しない」ということにつながるのです。長い間生徒を見てきた間違いのない印象です。最後まで、がんばった上で最後に現実的な入学、受験をするのはかまいませんが、夏休みの途中で、志望校を変えるほど危険なことはありません。

これは各種推薦入試についても同様です。第一志望の公募推薦などがあり、無理を承知で受験する時はがんばれるものですが、「推薦があるから〇〇大学を志望する」という場合、多かれ少なかれ「推薦が受かりやすい」と思っているわけです。まして、これが小論文や面接であったりすると、要は「受験勉強からの逃避」をしているだけです。

指定校推薦についても同様で、納得づくで出願するならともかく、下げて出願した場合、後で成功した友達を見ながら「受験すればよかった」などと思うようでは、選考されなかった人に失礼ですし、自分自身のためにもよくないでしょう。

「絶対現役」と言わない

これまでも何度か書いてきましたが、この言葉は禁句です。お子さんが勉強しないという悩みがあった時、何も言うな、ということではありません。「勉強しなさい」と言いたいなら「勉強しなさい」というべきだということです。現在の受験状況は、大学さえ選ばなければ必ずどこかに合格します。ある程度、受験勉強をした生徒なら、そこそこの大学（価値観は人によって違うでしょうが）の合格は必ずとれるのです。したがって、現役を強調すればするほど、結局、先ほどの項目の「志望校を下げる」意識に転化していきます。それはむしろ「勉強しない」

方向に向かわせる確率が高いのです。例としては、「科目を捨てる」「難しい分野を捨てる」、その程度で済めばいいのですが、何人かの生徒は自分の都合のいいように解釈をすすめ、「現役で受かるためには、科目が多すぎる」→「したがって科目を捨てる」→「〇〇という受験型の〇〇という大学にしばる」というような論理で、自分に都合の悪い難易度から目をそらすのです。大学受験において、科目の少ない受験型ほど一般に難易度が上がり、かつ併願関係は少なくなりますから、こうした論理は結果として、浪人への道まっしぐら、ということになるでしょう。

この心理は特に、推薦で多く見られるようです。「学習の成果が上がらない」→「普通の勉強はだめだ」→「小論文や面接ならなんとかなる」→「公募推薦を受験」というような形です。この論理も「小論文や面接ならなんとかなる」というところに破綻があります。合格のためには、準備が必要であるのに、小論文・面接＝大丈夫、と考えているところに危険があるでしょう。

親自身が「絶対現役で」と考えることにさまざまな危険が潜むことを理解してください。浪人させろ、というのではありません。現役で行くかどうかは、全て受験が終わった時に考えればいいことだ、ということです。

「〇〇大学でなければ受けるな」と言わない

このことについては、秋の保護者会で詳しく説明しますが、全ての受験が終わった後に「〇〇大学以外は行かせない」ということは必ずしも否定しませんが、受験前の大学でそういう誓約をつけるのはあまりいいことではありません。理由は次のようなものです。

- ① 第一志望を合格する前に併願大学をシミュレーションとして受験することは大事なことです。仮にセンターで合格をとっても、第一志望前に、きちんとシミュレーションしないと行かない。
- ② 仮に受かっても行かない大学だとしても、受かって浪人するのと、受けていないのでは、浪人したときの心理的プレッシャーが格段に違う。まして、落ちているとすれば、その程度の学力であったことを認識して浪人すべき。
- ③ 何より、「受けない」＝「受かる学力がある」という甘い認識にさせない。届かない第一志望をとりあえず受けることに苦しみはない。届くかどうかのところに向け、きちんと苦しむことが、浪人するにしても大切な勉強の一步。そのチャンスを無駄にはしてはいけない。

早く楽にしようとしない

いずれにしても、共通しているのは、親自身が「早く楽にさせてやりたい」と考えていることではないでしょうか。しかし、それは本当にこどもの為でしょうか。もしかして、「早く楽になりたいのは自分」なのではありませんか。

子どもが家にいると勉強していないことが見えていららするけれど、塾に行っていれば、学校に行っていれば安心するというのも同じ心理かもしれません。つまり、「早く受験が終わってほしい」のは、自分なのかもしれません。

受験制度がよいものか、悪いものかは賛否両論あるとは思いますが。しかし、生徒達はこの現実の中で、自分の目指す進路に向けて、苦しい戦いをしているわけです。私たちは、正しく「苦しませる」ことが大事なのではないかと思えます。生徒が社会に出て行くまでにあと数年しかありません。自分なりに考え、自分なりに行動し、自分なりに苦しむことがマイナスに働くとは思いません。マイナスに働くとすれば、親が先回りしてその困難を一生懸命摘んでまわり、地ならしをしてしまった時のように感じます。

子どもたちは子どもたちなりに、自分の人生に立ち向かっています。立ち向かうということは、常に苦しく、思い通りにいかず、不安なものです。どうすれば、サポートできるのかというその問いかけの答えは、あったとしても非常に難しいことのような気がしますが、単純にいつてしまえば、正しく戦わせる、悩ませる、苦しませる、ことなのではないでしょうか。遊んでいたとしても、将来の不安にさいなまれる、さいなまれなかったとしても数ヶ月で現実が突きつけられるのが受験生です。

保護者自身が楽になりたいという気持ちから、前述したような甘言を生徒にささやかぬよう、

ご協力をお願いします。

最後まであきらめない！

いよいよ最後の夏がやってきました。高校生活最後の夏、受験前の最後の夏です。進路、ひいては自分の人生について、真剣に考え、立ち向かう時がやってきました。考えてみれば、ここまでは、なんとかなってきました。自分の今の状況が必ずしも好ましいものかどうかは別として、こうして高校まで無事に通っているわけですから、決してベストでないとしても、なんとかなっているわけです。

しかし、ここからはそうはいきません。大学進学、就職…さまざまな人生の選択が君たちを待っていることでしょう。この日本においては、高校に進学するという事は、かなり一般的な常識であり、この「高校受験をする」ということについては、中学校の時に行われた選択ですから、準備に関しても、様々なサポートがあり、また、準備もある一定のパターンの中で行われたものです。それに対して、大学受験は、それ以外の選択もありますし、手段もさまざまですし、それだけで何かが決まるわけではありませんし、そして、一方、親の力から離れて自分ひとりで生きることを意識しはじめることになるのです。

「あきらめない」と書きましたが、自分の人生をあきらめるわけにはいきません。最後まで、自分だけは自分の人生に付き合わなければいけません。それどころか、君たちはあとあと10年もするうちに、結婚や出産など、他人の人生さえも大きな責任として背負わなければなりません。ですから、あきらめたくても、あきらめるわけにはいかないところに突入するのです。

夏休みを前に、君たちが昨年書いた「自分への手紙」を返します。ともすれば、脳天気な1年前の自分は、「あきらめないぞ」と簡単に書いているでしょう。それに比べて、今の君たちは、もしかしたら、ひとつずつ現実にぶつかり、あきらめはじめているかもしれません。ただ、それは正しいことです。本気で目標に向かおうとすれば、苦しいに決まっています。本気になれば、それに比例して目標の困難さに気づくからです。言い換えれば、「あきらめない」と脳天気に書いている1年前の君は本気でなかったということです。だから、今の君に気楽なことを言えるわけです。

しかし、考えてみてください。本気でないときはあきらめない、本気になったらあきらめたい。そんな安直な人生でいいのでしょうか。これから社会に向かう君たちは、必ず苦しいことに出会うはずです。それは「本気で」「できないことを」「なんとかしたい」と願うからです。その苦しみに出会うたびに「あきらめる」ことを続けていいのでしょうか。

受験というものを通じて、是非、最後の勉強をしてください。私たちがこうしてバックアップできるのもあとわずかです。大学や社会という場所では、直接的なバックアップや指導はないのです。

苦しくなっても簡単にあきらめない。苦しいことは、目標に向かって正しいステップです。すくなくともこの夏休み中は、しっかりと苦しみましょう。そして、その中で、気分転換や悩みの吐露を、テクニックとして身につけましょう。

ですから、学校に来て友達に会う、先生に相談するというのは、大切な手段であり、逃げではありません。

保護者の方は、是非、「楽にする」というのは、こうした「苦しみ」の発散の仕方でもフォローしてあげてください。おいしい食事を作る、模試の成績が悪ければ好物を作る、自分の苦しいときの話を…みんなが通った道です。そして、みんな成功したわけではありませんが、今となっては、その課程が懐かしい思い出になっている、そんな話をしてあげてほしいと思います。もちろん、口べたであれば、遊びに連れて行く、買い物につきあってあげる、お小遣いをあげて遊ばせるなどなど、フォローの手段はたくさんあると思います。

さあ、最後の夏です。あきらめないために、みんなで一丸となって、がんばりましょう。

30期学年目標

未知の世界を切り開き、社会に貢献する、自立した「人財」へ

目標とする人間像

「気づき」のある人間 「聞く姿勢」を持つ人間 「学び続ける」人間

身につけるべき力

目標から「逆算」する力
やるべきことを「具現化」する力
他者を「理解」し、「理解される」力

夢実現のための十則

- 夢を持て。ない夢はかなわぬ。目標なく一生懸命やることに酔うな。
- やることを与えられるな。自分のために創り出し、形にして期限を決めよ。
- 他人と関われ。他人を理解しようとしろ。他人に理解される努力をしろ。
- 挨拶をせよ。人に気づき、人に気付いてもらえる。
- 毎日他人に奉仕しろ。心がきれいなら他人も応援してくれる。
- 話を聞く姿勢を作れ。聞く人には教えたくなる。助けたくなる。
- 書け。何度でも書き直せ。書かないことは考えていないこと。
- 自分と戦え。自分は見ている。人と戦うな。気にするな。自分が変われ。
- 大事なことは最初にやれ。優先順位を考えろ。タイミングを逃すな。
- 成功を繰返し、失敗を繰返さぬよう分析しろ。原因を五回さかのぼれ。



今後の予定

7月11日（月）～16日（土）面談週間
7月20日（水） 終業集会 授業なし
7月21日（木）～ 夏期講習

夏休み中の学校での自習は、8月10日～17日をのぞき、バスがある日について、行うことができます。（教室を開放する予定です）任意の登校日（教員が出勤し、学習の進捗状況を相談できる日）を設定することを学年で検討しています。